

交 流

支えあう「ことば」と「心」

広島文化学園大学看護学部
深 川 賢 郎

「朝日新聞」(2011.10.20)の〈天声人語〉に、「ばか」ということばについての話題が出ていました。「平野復興相が公の場で、津波について『私の高校の同級生みたいに逃げなかったばかなやつがいる。彼はなくなりましたが』と語ったそう。これも辞書そのままの意味ではなかろう。だが問題になり謝罪した。ことばをめぐる空気が、どうも息苦しい」と述べています。問題になったのは、野党の偉い人が、この発言を取り上げて追求したためでした。

津波が来ているとき逃げないということは、なにかの事情があったのです。それを「ばかなやつ」と言ったのは、同級生だから言えたことだと「天声人語」の記者は解釈しています。親しさゆえに、彼を思いやって、「何で逃げなかったのか」と叱っているのです。記者は、このことばを、友人を思う「哀惜と喪失感、憤りがせめぎ合う」ものだ、と読み取っています。

＊

実業界のある人が、やり場のないボヤキを書いています。

「まことに肝の冷える話であるが、世にハイ人が、恐ろしい勢いで増加している。ハイ人は「廃人」にあらず、……ハイ人とは、挨拶のできない人を指す、私の造語だ。たとえば、早朝の電話をかけるとき、……『おはようございます』と明るく話しかける。電話の向こうで『ハイ』。なんとも抑揚のない、無気力な声だ。これを朝の一番に聞かされると、当方も引きずられそうになる。これではいかぬ、とわざと明るい声で、『いつもお世話様になります』と続ける。ところが相手は、……もう一度『ハイ』という」。

電話の常套句も知らない人物に立腹しています。そこで、彼が妻君の前で「どうなっているんだ」と怒っていたら、妻君は、いとも冷静な声で言います。

「あなた、〈いただきます論争〉って知っている？ 給食費を払っているのだから、給食の時『いただきます』という必要はない、という声があるのよ」。

たしかに、親の支払いで、自分の給食を食べるのだから、何も恵んで「いただく」わけではありません。その人物は、「ここに原点がある」と考え、ことばを返す元気を失ったといえます。^(注)

＊

道元禅師に、「典座（てんぞ）は、絆（ばん）をもって道心となす」ということばがあります。“食事を担当する典座は、絆＝タスキがけで自分の道を頑張る”という意味だといえます。

このことばには、三つの心が託されているといわれます。一つは、〈喜心〉＝感謝、喜びの心です。食事を作る喜び、給仕する喜び、食材を生かす喜び、などを表します。料理係としての使命に徹する喜びです。二つ目の心は、〈老心〉＝親心、父母の心です。思いやりの心、他者への連帯と感謝をわきまえる心です。三つ目の心は、〈大心〉＝大きな、こだわらない心です。偏らない心、社会に対して胸を張って

生きる広い心の意ということのようです。

典座は、三つの心をタスキに込めて自分の仕事に専念します。

道元禅師が、食事担当の典座にこれだけ大きな意味を託したのは、彼が中国に渡ったとき（24歳ころ）の体験（出会い）が大きく影響しているといわれます。

ある時、暑い夏の日差しの中で、シイタケや海草を干している老僧に会いました。道元は言います「こんな暑いところで、あなたのようなお年寄りが……若い人に代わってもらってはどうですか」。老僧は言いました「他はこれ我に非ず」。道元は言います「では、もう少し涼しくなってから仕事をしてはどうですか」。老僧は言いました「この日差しが食材をおいしくするんだ。時、人を待たず」と。老僧のことばが道元の脳天を撃ちました。

食材を作る人、料理する人、給仕する人、これら食事に参加した多くの人々への感謝を「いただきます」ということばに込めることは、何も道に外れた論理ではないと思うのですが。

＊

以前、マークス寿子『ひ弱な男とフワフワした女の国日本』（草思社）という本を読んでいたら、言葉についての苦言が述べられていました。

「バブル経済時代の子どもの育て方、教育の仕方を、私は〈へつらい文化の教育〉と呼んでいいような気がする。子どもに真正面から、これはいい、あれは悪いということを教えたり、躰けていない。……そのぶんお金で償ってきたのである。バブル経済から四、五年遅れて、〈バブル文化〉がやってきた、と考えたい。……私はイギリスで日本語を教えている。八〇年代以降、の新しいことば遣いや、くずれたことば遣いに私が慣れていないので、日本から来た日本人学生がくずれた日本語を話すのにショックを受けた。……

くずれたことば遣いの一つに、「あげる」という言葉がある。「あげる」というのは、だれか同等の人、目上の人にもものをあげる場合に使う。……犬や猫など、そういうものに対しては「あげる」は使わない言葉である。……イギリスで、日本語を学ぶ学生が「猫に餌をあげました」と書いたら、私は、「猫に餌をやりました」と訂正する。……

自分がものを食べるときに、「いただく」という人がいるが、これもへんな使い方である。人からものをもらう場合、「いただきます」とか、「いただいた」という。……が、いまの若い人たちは「夜食をいただいて寝ました」というように、自分ものを自分で食べる行為に対して、「いただく」を使っている。

マークス寿子さんに言わせると、先の〈いただきます論争〉は、〈バブル文化〉の産物ということになるでしょう。経済的に少しでも裕福になった日本人の、おごった「心」が、人のお世話になんかなっていないと意気がっているようで、いかにも薄っぺらです。

＊

「おいしい」ということばは、もともと女房ことばで、女性が育てたことばです。では、「うまい」は、男性のことばでしょうか？ 女性は、「うまい」とあまりいいません。

「うまい」は、「うまし」という古い日本語からきているのですが、「うまい」の漢字には「上手い・旨い・美味い・巧い・甘い」などが充てられています。意味の広がりや豊かさがうかがえます。本来「うまい」は、「うむ〈熟す・果実が成熟する〉」という意味ですから、「甘い」や「おいしい」が元の意味のようです。赤ちゃんことばの「ウマウマ（おいしいもの）、マンマ（ごはん）」も同じ語源からきています。したがって、「うまい」は、特に男性の用語でもないし、下品なことばでもないようです。

夕方、「おはよう」と言ってお仕事にやってくる「ママ」は別として、お母さんのことをママと呼ぶのは、外国語ですが、ウマウマ→マンマ→ママと連絡していて、不思議です。中国語や韓国語でも、お母さんのことを「ma(m)ma」というのは、そのマンマ一致しています。

*

マークス寿子さんは、くずれない日本語をイギリスの学生に教えるといいます。いつか、彼女に日本語を学んだイギリスの学生たちが日本にやってきたとき、日本人は、彼らから、『日本ニハ、変ナ日本語ヲ使ウ日本人ガイル』と揶揄される場面があるかもしれません。

日本語が英語圏の中で真空のような状態に固定されている国で、日本人は、日本語のくずれや流行を体験できません。そこでは、伝統に則った日本語が維持継承されるでしょう。しかし、ことばは、いつの時代でも生き物ですから、変化を止めることはできません。

ただ、『ことばの変化』には、その背景となる『心の変化』を伴います。ことばと心とは一体ですから、二つの相が一つの姿を成していて、心はことばを巻き込み、ことばは心を包み込む働きをするからです。伝統のある日本語を堅持できないことは、変化した「心」が新しい時代を作っているからでしょう。しかし、日本語が本来持っている品性の高い「心」を喪わないようにしないと、軽薄な日本語が私たちの周囲に蔓延し、深い意味を持つ、繊細な日本人のしなやかな心を枯れさせることになります。

たとえば、「女性らしい言葉」「男性らしい言葉」の区別も大切にしたいことの一つです。

呉市内のあるところで、出会ったことです。若い母親が、四歳くらいの男の子に、『くだらんことを、アーダ、コーダ言うんじゃない！』と言い、『うるせーな。いい加減にしやがれ！』と舌鋒きびしく迫っていました。剣で刺すような冷たいことばが、わが子を拒絶し、苛んでいます。無力な幼児は、呆然として体を硬直させ、心のカプセルに閉じこもりました。その母親は、敗者を、さらに鞭打っています。そばにいた私の胸に、鋭い痛みが走りました。

母親も、よほど立腹していたのでしょう。幼いわが子とヤクザの修羅場を演じている姿には、お母さんの顔はありません。「母」という字は、「女」という字を膨らませて、二つの〈乳房〉を点じています。この〈胸〉は「母」の象徴です。その胸は、厳しい航海で痛んだ心が、優しさと安らぎを求めて戻っていく母港です。この男の子は、母港に帰ることを拒絶されています。幼い心は、どこに安らぎを求めていくのでしょうか。

幼い時から口移しに教えられることばを、mother tongueといいますし、そこから母国語、母語ということばが生まれました。ドイツ語でも、Muttersprache というようです。第一言語の教育を、人生の、最も早い時期から担当するのは母親です。その負担と責任の重さには、計り知れないものがあります。母親用の「ことばの手引き」も「学習指導要領」もありません。

先ほどの男の子は、お母さんから刷り込まれた残酷なことばを、たぶん、心の翳りとして生涯、拭い去ることはできないでしょう。

(2011・11・8)

(注) 吉村 昭『わたしの流儀』(新潮文庫) 2001. 4.